人間力を高めるしなやかで強靭な知の力、「人文知」こそが世界を和やかに保つ

「人文知は〝人間力に裏打ちされた叡知〟である。それは、深くて広い知恵の集積であり、強くてしなやかな力の源泉であり、豊かで闊達な心の佇まいの拠り所である」「これから企業経営に携わる者は、〝人文知〟に、より多くを学び、高い感性や鋭い洞察力を磨かなければならない」。これらを趣旨として設立された『人文知応援フォーラム』。その代表理事の大原謙一郎氏にその意義を伺う。

大原謙一郎

一般社団法人 人文知応援フォーラム 代表理事
公益財団法人 大原美術館 名誉館長

「私は29歳にして人文知を知りました」。こう語るのは、ビジネスの世界で活躍した大原美術館名誉館長の大原謙一郎氏。その大原氏が青春時代に仕上げた一つの仕事に「不織布」がある。クラレで働いていた時、ジョンソン・エンド・ジョンソンと不織布をつくる合弁会社を設立し、岡山工場で操業を始めた。

その交渉中に、為替相場の変動についてアメリカ側と意見対立が生じた。しかし、激しい議論の中、相手の会長との間で人間と人間の共感を覚える時があり、ついに合意に達した、という。それが冒頭の言葉である。

大切にしている言葉は「生きて働け」。これは父親である大原總一郎氏が常に言っていた。美術館も生きて働かせる。人文学の学問も音楽も芸術も生きて働かせる、と。

「倉敷も、文化や生活の塩漬けの遺跡ではない。その中で生きて働いている人たちがいるというのが倉敷の値打ちだ」。

大原氏が現在、力を注ぐのは「人文知応援フォーラム」。これまでのビジネス、そして文化界での経験から痛感している「人文知」の大切さと意義。人類の明るい未来のために、人文知の理解と全世界への普及が待たれる。

撮影◎村田一豊

戦後の新教育と家庭の教育方針で培われた独立心

伊藤　今回は「人文知応援フォーラム」代表理事の大原謙一郎さんにお話を伺います。

大原代表のお祖父様は大原孫三郎さん、お父様が大原總一郎さんで、大原美術館を設立・運営されてきたことでも有名です。財界人、ビジネスマンとしても社会、そして文化に貢献された方のお孫さんでありご子息であるわけですが、これまでのご自身の道のりについて伺えますでしょうか。

大原　私は昭和15年生まれ。第二次世界大戦の最中で、私が生まれて間もなく真珠湾攻撃が行われました。昭和20年に終戦を迎え、昭和21年に京都教育大学、当時は師範学校でしたが、その附属京都小学校に入学しました。ここは実験教育の最先端で、戦後新教育の跳ね上がりもいいところの学校でした。

ですから私自身について言えば、いわば戦後民主主義第一世代というか、戦後民主主義原理派というか、民主主義の原理原則を小学校から骨の髄に叩き込まれています。学校も生徒自治会ではなく「学校市」という形になっており、市長がいて市議会があって、後援会があるという三権分立で、選挙もこれほどクリーンな選挙はないというものでした。立会演説会もやってきました。

もう一つは、戦後ですから戦時中に対するアンチテーゼがかなり強い時代でした。ですからいわば自由自在で、小学校でも新教育というのは〝全部自分でやる〟教育でした。先生は教室の後ろで見ていて、教壇に立っているのはだいたい生徒でした。それで私たちは自分たちでなんやかんや言って、あれこれ発表したり議論したりしていました。しかし後々、先生に聞いてみたら、「あれは大変だった」と。3クラスあったのですが、毎晩毎晩、担任の先生が集まって、